

Title	昭和二十二年度秋期 深大寺見學報告
Sub Title	
Author	
Publisher	三田史学会
Publication year	1949
Jtitle	史学 Vol.24, No.1 (1949. 10) ,p.129- 130
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	彙報
Genre	Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19491000-0129">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19491000-0129</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

英國労働運動と労働党

工 藤 博君

祖先信仰への道一氏神神祭について、農神について

伊 沢 淳君

ルネサンスに於けるフローレンス市の役割藤井富士也君  
メリーニ・スチュアートに就て

大 場 幹 雄君

ヴィクトリヤ女王書簡集について

東 環君

日本新石器時代文化に於ける東南亞細亞的様相

江 坂 輝 獅君

律令奴隸の社会的意義に就て

中 井 和 世君

## 昭和二十二年秋季 深大寺見學報告

昭和二十二年十月二十五日稍々冷氣さへも加へた臺天午前十時京王線調布駅に集合、北方約半里深大寺に向ふ。参加者は伊木先生始め今宮浅子両教授並学生十数名。深大寺は南多摩郡深大寺村に在り附近一帯は紅葉も終へた森に囲まれ誠に幽靜の境地である。

当寺は寺領五十石の御朱印を賜はり天臺宗東叡山の末浮岳山昌樂院と号す、天平五年の建立にて開山は満功上人と伝へる。古は法相宗なりしが貞觀年中惠亮和尚住職の時改宗したと云ふ。

### —新編風土記—

更に同書によれば惠亮和尚は当山の寺務の故に相宗を改めて永く臺教の宗門に歸し是より以来燈々相伝へて繁盛他寺に異つて居つたが源家の祈願所として東国第一の密場であつたと述べ

て居り、且一度ならず二度までも火災に遭ひ世田ヶ谷吉良家が当時の衰落を歎き再興し当郷を以て供料に充てたと言ふ事である。而して世田ヶ谷吉良家と共に没落し再び危くなつた廻を東寺院の附近は人家も少く再三の火災にて昔を偲び得ないのは遺憾であるが現在は本堂に置かれた国宝釈迦牟尼佛拜観の人がかなり多いと言ふ。

先づ本堂に於て浅子先生より国宝釈迦像に就て御説明があつた。出所は未だ不明であるが東日本には極めて稀な古佛で日本にある釈迦佛にして、腰懸けたものは少く、美術史上貴重な遺品であり、白鳳時代の鑄造と断ぜられて居る。誠に豊潤な美が全体に見られ处处に金箔の名残りを汲む技術は巧妙を得て居る。思ひ出置共々に飛鳥芸術の流れを汲む技術は頗る優れたものである。空穂の歌

鉦鳴らし僧が鎖はづす御厨子に

釈迦牟尼僧のおはしたまへる

—空 穂—

佛像拜観の後伊木先生より当寺所有の古文書に就き御説明があつた。当日実見した主なものは左の通りである。

### 一、当山縁起写絵入二卷

### 一、融通念佛記録絵巻物二卷

一、徳川家よりの御朱印入り文書  
一同一室に会して食事、帰路鐘を拜見、永和二年丙辰八月十五日の銘あり。

終つて一時三十分解散。天気はあまり良好ならざるも見学に差支へなかつたのは幸ひで、有意義な見学会であつた。最後に寺の方々が終始快く御援助下された事に対し厚く御礼申し上げる次第である。

昭和二十三年伊豆山神社見學報告  
年度春期

五月二十三日、見学旅行の地を熱海の伊豆山神社に選び、七時五十分伊木先生と学生十数名は東京駅を出発した。戦後とも思へぬ湘南の風物を楽しみつゝ、十時五十分熱海駅に到着し、先輩プリンクマイヤー夫妻と合流して直ちに小雨の中を神社へと向つた。

温泉場から下宮と云はれる御旅所を経て、本社迄の六百数十段の石段参道を登り、雨も激しくなつて來たので直ちに社務所に入り、暫時休息の後古文書類其他の社宝を拜見する。先づ、一、国宝後祭良天皇御宸筆の般若心經。云ふ迄も無く、これは、天文九年厄病流行の際、一日も早くこれが止み、民草の安からむ事を願はれて、天皇自ら筆を取られたものであり、現在は当社のほかに、三河・甲斐・信濃・安房・越後・周防・肥後等に残つて居る。猶ほ、当社のものは、先年伊木先生が発見されたものである。其他、

一、佛說无所慚望經。  
一、佛說阿彌陀經。

(以上何れも紺紙金泥)

一、般若心經。（黃紫染紙）

一、法華經八卷。（豆経）

一、法華經普門品。（亨保八年正月二十六日、浅井勝之丞

室原田氏書）

一、應永八年十二月二十九日、左衛門尉憲清狀（御奉行所充、伊豆國熱海郷闕所分事）二通。

一、古文書写眞三通。（原文書は伊勢に於て戰災にあつて失はれたとの事）

1. 曆応三年八月十九日、三河寺師冬願文。

（走湯山權現立願事）

2. 建長六年十一月十七日、將軍家政所下文。

（美作国坪和西郷住人充）

3. 元弘三年九月十四日、足利尊氏御教書。

（伊豆國走湯山密嚴院寺務職事）

一、徳川將軍朱黒印状写、十六通。

雨は益々激しく、蒼黒な森林を通して海上に初島が煙つて見える。晴天ならば大島をも望み得よう。景色を楽しみつゝ晝食をとり、社務所の方々の語られるのを聞けば、祭神の伊豆大神は往古より温泉の守護神であり、昔殷賑を極めた時分には多くの支坊を有し、箱根・三島の両社と共に、関東の鎮守であつたとの事。又此の伊豆の湯は、太古から「伊豆の走り湯」と云はれた、と云ふ。

高野山高室院の末寺で、其の後伊豆山神社に合併され、明治の代、神佛分離に依つて独立した般若院も見学の予定であつた